

氏 名	アケツ ヨウイチ 坪 洋一
所 属	人文科学研究科 社会行動学専攻 社会福祉学教室
学 位 の 種 類	博士（社会福祉学）
学 位 記 番 号	人博 第 134 号
学位授与の日付	平成 30 年 9 月 30 日
課程・論文の別	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題名	R. M. ティトマス贈与関係論の現代的意義： 福祉市民論の構想に向けて
論文審査委員	主査 教授 岡部 卓 委員 教授 杉野 昭博 委員 教授 堀江 孝司

【論文の内容の要旨】

【第 1 章 研究の目的と背景】

本章では、本研究が何を論じるのか（目的）、なぜそれを論じるのか（背景）、どのように論じるのか（方法）を明示するとともに、いかなる視点から研究対象であるティトマス贈与関係論の現代的意義を論じるのか（視点）について概略を示した。

第 1 節では、本研究の目的が、R. M. ティトマスの福祉思想を晩年の主著『贈与関係』に焦点を当てて再検討し、その現代的意義を考察することにあることを示した。

第 2 節では、本研究がそうした目的を掲げた背景について、20 世紀型の福祉国家のあり方が抜本的に見直されているなかで、原点回帰と温故知新となるような議論が求められているという認識から、そうした議論にふさわしい研究対象としてティトマスの贈与関係論を選択したことを指摘した。

第 3 節では、①福祉イデオロギー研究、②ティトマス研究、③シティズンシップ研究の知見を参照した。そして、①からはティトマスの思想的背景を体系的に捉えるための方法を、②からはその福祉思想の全体像と特色を理解するための方法を、③からは贈与関係論の現代的意義を明らかにするための方法を導出した。

第 4 節では、ティトマス贈与関係論の現代的意義を考察するにあたって、シティズンシップ論を分析や議論の文脈として重視するという研究の視点を明示した。現代のシティズンシップ論では、「市民であることの条件」（市民権）のみならず「市民になるための条件」（市民性）のあり方に関心が向けられている。本研究では、ティトマス贈与関係論を、この二つの側面を含んだ「贈与のシティズンシップ論」として捉え返し、その特徴や意義の明確化を図った。

【第2章 ティトマスの福祉思想：贈与関係論の文脈を探る】

本章では、贈与関係論の文脈をなす福祉思想の全体像を把握した。ティトマスの福祉思想の全体像と特徴を明らかにするために、まずティトマスの経歴と業績を簡単に振り返った。次に分析の方法を明確にしたうえで、ティトマス福祉思想の背景をなすフェビアン社会主義の概略を捉え、そのもとでのティトマスの独自性を明らかにした。さらに、以上をふまえて、より内在的な観点からティトマスの福祉思想に接近し、その特徴を明らかにした。

第1節では、ティトマスの略歴を示したあと、その研究関心や主題の変遷を初期・中期・晩期に分けて解説した。まず、初期の研究関心が「家族、貧困、人口」に関わる社会問題の実態解明と倫理的批判にあったことを確認した。次に、中期の研究関心が、①伝統的な分析対象の拡張（福祉の社会的分業の発見）、②市場経済と産業化がもたらす弊害に対する補償と社会統合の重視（普遍的な社会サービスの擁護）、③普遍的な社会サービスが届きにくい人々への対応（積極的優遇の推進）にあったと指摘した。最後に、晩期の研究関心として、社会政策学のあり方に関するティトマスの議論を取りあげた。あわせて、ティトマスが素描した社会政策の三つのモデルにも言及した。

第2節では、ティトマスの福祉思想の「背景」にアプローチするうえでの分析方法を明確にするために、「福祉イデオロギー研究」を参照した。まず、福祉イデオロギー研究という「イデオロギー」とは、福祉の目標などに関する見方を形づくる「視座」であることを確認した。次に福祉イデオロギー研究が示してきた主な類型を示した。さらに、福祉イデオロギー研究のバージョンアップを図っているヒューイトの議論を取りあげた。

第3節では、前節で提示した分析方法に即して、ティトマスの福祉思想の背景としてのフェビアン社会主義の概要と、そうした文脈のもとでのティトマスの福祉思想の独自性を明らかにした。まず、ジョージとワイルディングに依拠して、フェビアン社会主義（民主的社會主義）の概要を整理した。そして、フェビアン社会主義は「平等、自由、友愛」を強調したが、とくに「友愛」を重視しており、ティトマスの贈与関係論はその典型であったという著者たちの解釈を確認した。次に、同じくジョージとワイルディングの分析に依拠して、フェビアン社会主義におけるティトマスの独自性が、①福祉国家の発展要因を階級闘争に特定せず多様な要因を認めたこと、②福祉国家が利他主義と社会統合を促進し、「負の福祉」の補償を行ってきた点をとくに支持したこと、③福祉が社会のなかでの「友愛」を促進することを強調したこと、以上の3点に見いだせることを示した。最後に、ジョージとワイルディングとは異なった観点から、フェビアン社会主義の系譜におけるティトマスの独自性を示しているヒューイトの議論を検討した。そこからは、国家福祉一元論のもとで二項システムの発想を継承したことと、グリーン理想主義思想からトーニーの倫理的社會主義思想に受け継がれていった「相互主義」のラインを社会民主主義の思想潮流に深く刻み込むことに成功したことの2点がティトマスの独自性であるという解釈が

得られた。

第4節では、二人の対照的なティトマス論をとりあげ、ティトマス福祉思想の全体像と特徴を内在的に検討した。その一人であるワイルディングは、ティトマスの福祉思想を10の命題に集約させつつ、鋭利な批判を投げかけたが、本節ではそれをティトマスの福祉思想への「提言」として解釈した。大まかに言えばワイルディングの提言は、社会市場一元論を是正することと、構造分析を取り入れることとを求めるものであった。これに対してディーコンは、ティトマスの視座を「利他主義の表出としての福祉」と名づけつつ、贈与関係論を中心とするティトマス論を展開したことを指摘した。そして本節では最後に、構造分析の台頭などによって、ティトマスが重視した利他主義が軽視されたことが、人間観の「空白」を招いて右派の人間観（福祉依存批判、アンダークラス論）の台頭の一因となったというディーコンの解釈を示した。

【第3章 ティトマスの贈与関係論：その全体像と評価】

本章では、まずティトマス贈与関係論の内容を整理し、つぎにティトマスの福祉思想の中での贈与関係論の位置づけを明確化したうえで、最後にこれまで贈与関係論がどのように評価されてきたのかを確認した。

第1節では、第一に、『贈与関係』のモチーフが、社会福祉（社会政策・社会サービス）の本質を各国における血液の扱い方から探っていくことにあることを示した。第二に、『贈与関係』の客観的分析パートでは、血液ドナーを8タイプに分類しつつ、米国では大半が利己的なタイプのドナーであるのに対して、英国では総じて利他的なタイプのドナーによって自発的な血液提供がなされていることが明らかにされたことを指摘した。第三に、『贈与関係』の結論パートでは、非倫理的観点からいっても倫理的観点からいっても、血液提供の商業化は不適切であるとの評価が下されていることを確認した。第四に、『贈与関係』の結論パートでは、「市民の社会的・道徳的な潜勢力」の発揮を手助けし、市民の「与える自由」を社会権として保護し拡張することが、社会政策の潜在的な役割であると主張されていることを明確化した。第五に、「個人の与える権利と自由」をティトマスが強調した理由は、歴史的・技術的な「決定論」を回避するためであったと指摘した。そして最後に、本節の検討では抜け落ちてしまった部分を含めて、『贈与関係』全体の要点をまとめ、「利他主義」が重要な概念として位置づけられていることをあらためて確認した。

第2節では、前節では十分に扱えなかった「贈与」と「利他主義」に関するティトマスの捉え方について検討した。第一に、ティトマスの福祉思想全体における「贈与」の位置づけを検討し、経済市場での「(等価)交換」と対比されてきたことを確認した。第二に、『贈与関係』の第5章においてティトマスは、人類学が探求している「贈与」(贈与交換)と現代の供血との関連性を示唆しつつ、血液贈与ならではの特質を「匿名性の原理」に見いだしていることを指摘した。第三に、『贈与関係』の第13章においてティトマスは、第5章での議論を延長する形で、現代の血液贈与と未開社会の贈与交換との異同を論じ、現代

の西欧社会では、匿名的な利他的贈与の「自由」が不当に制約されていると主張していることを示した。第四に、ティトマスは「利他主義」が社会の存立にとって決定的に重要であるにもかかわらず、経済市場が利他主義を衰退させてしまいかねないと強調していることを明らかにした。最後に、ランドとページの解説に依拠して、英国社会政策学における「利他主義」の標準的な捉え方を検討し、標準的解釈のもとではティトマスの贈与関係論が、国家福祉全盛の時代（福祉国家の黄金期）において、社会政策とは家族を超えて利他主義を拡張する仕組みであると主張した古典として扱われていることを確認した。

第3節では、『贈与関係』に関する様々な評価を検討し、再評価にあたってクリアしなければならない課題ならびにそのためのヒントを探った。まず『贈与関係』が現在でも社会政策学をはじめ様々な学問分野の研究において言及され続けていることを示した。次に、『贈与関係』に対する批判的評価を行ったラフィット、ピンカー、ルグランらの議論を検討した。そして、ティトマスが経済市場と社会市場とを切り離し、経済市場のポテンシャルを軽視した点が問題視されてきたことを確認した。最後に、フェビアン社会主義の系譜のもとでティトマスが人間性に関する「相互主義モデル」を継承・発展させた点を肯定的に評価しているヒューイトの議論をとりあげた。

【第4章 現代シティズンシップ論の展開と贈与関係論】

本章では、ティトマスが贈与関係論を提起した歴史的背景を明らかにしたうえで、その史的展開の延長上に登場した現代のシティズンシップをめぐる論争状況の概要を示した。次章以降、本章で整理したシティズンシップのあり方をめぐる一連の議論を文脈とする形で、ティトマス贈与関係論を再評価し、その現代的意義を考察した。つまり本章は、第3章までの議論と第5章とを架橋する役目を果たしている。

第1節では、ティトマスが贈与関係論を提起した歴史的背景を、ページの解釈に依拠して明らかにした。あわせて現代シティズンシップ論が登場した背景を整理した。まずページのいう「利他的福祉国家」の源流としての中世以来のキリスト教的慈善と19世紀のフィランソロピー活動の展開から、19世紀後半と20世紀初頭における国家集産主義の進展をへて、第二次世界大戦とその後の福祉国家建設に至る経緯を概観した。つぎに、戦後福祉国家の利他的側面を正当化しようとしたティトマスの議論に対する種々の批判に関するページの整理をうけ、次のような解釈を示した。それは、戦後福祉国家がはらんでいた種々の要素のうち、ティトマスがさらなる発展を期待したものこそ、与え手と受け手の非対称性に基づく「負い目」やスティグマを払拭するための「匿名的で非人格的な利他主義」（つまり普遍的な利他的贈与）であったのではないか、という解釈である。だが、こうした福祉国家の正当化論はティトマスの死後に忘却され、入れ替わりで保守党の利己的な反福祉国家の考え方と、労働党の互酬的な脱福祉国家の考え方が台頭した。最後に本節では、1970年代から現在に至る利他的福祉国家の再編と変容は、国家と市民との関係にも影響を及ぼし、シティズンシップ論を活性化していったことを指摘した。

第 2 節では、シティズンシップに関するマーシャルの古典的定義や、福祉国家との歴史的な関係など、基本事項を確認した。そして、シティズンシップが論争的で多義的な概念であること、福祉国家の盛衰にあわせて論じられ方が変化してきたこと、そしてシティズンシップには「深さ・広さ・強さ」の次元があると指摘した。そして、「深さ」とは市民としての権利や義務が更新・累積されていく次元であり、「広さ」とはそれらが及ぶ地理的範囲が拡大されていく次元であり、「強さ」とは政治的共同体や制度へのコミットメントや市民としてのアイデンティティの度合いが強まっていく次元であることを確認した。

第 3 節では、シティズンシップのあり方をめぐる現代的議論を検討した。まずフェミニスト・シティズンシップ論が、「深さ」の次元での刷新を求め、女性をはじめとする少数派の参加に関わる権利とともに、ケアの権利と義務の拡張を目指してきたと指摘した。次にグローバル・シティズンシップ論が、「広さ」の次元での刷新を求め、「グローバル市民」の地位（権利・義務）と条件（意識・倫理・実践）のあり方をめぐって、従来の国民国家を中心としたシティズンシップの見方に刷新を迫っていることを示した。さらに市民共和主義的シティズンシップ論が、政治的共同体へのコミットメントや貢献といった「強さ」の次元での刷新を求め、自由主義的シティズンシップと対極にある議論として復権したことから、それが現代シティズンシップ論における強調点の変化を最も鮮明に示していることを確認した。

第 4 節では、「縦の関係から横の関係へ」また「法から倫理へ」といったシティズンシップ論における強調点の変化が、「市民であることの条件」だけでなく、「市民になるための条件」が問われるようになったことを示しているとの解釈を提示した。つまり、従来の自由主義的シティズンシップのもとでは、「市民であることの条件」として、もっぱら市民（国民）がいかなる「地位」（とくに国籍に付随する権利・権原としての「市民権」）を享受すべきかが問われてきたのに対し、現代シティズンシップ論のもとでは、「市民になるための条件」として、人々がいかなる倫理的な徳性や資質を陶冶し、どのような義務や責任を実践すべきかという「市民性」のあり方が問われるようになった、ということである。次に、各視座が「市民になるための条件」として、いかなる「市民性」のビジョンを示しているかを整理した。さらに市民性の概念について検討し、「市民になるための条件」と「市民性」を同一視することには問題がないと指摘した。

【第 5 章 贈与関係論の現代的意義】

本章では、ティトマスの贈与関係論をシティズンシップ論として読み替えた「贈与のシティズンシップ論」について、その現代的意義を検討した。

第 1 節では、「贈与のシティズンシップ論」について、社会政策によって「与える権利」を社会権として保障された市民が、「社会的・道徳的な潜勢力」を発揮することで、利他的な「市民性」を陶冶・促進・表出し、「不特定の見知らぬ他者」への匿名的な贈与を実践していくことを期待する規範的なシティズンシップ論であると規定した。次に、「贈与のシテ

「シティズンシップ論」の思想的特徴は、「平等」「自由」「友愛」というフェビアン社会主義が重視する価値を体現している点、普遍的な利他的贈与の実践を市民に期待している点、相互主義の伝統を継承している点にあると指摘した。そして最後に、普遍的な利他的贈与を強調することには批判が止まないにしても、そうした贈与がなされうる証拠や根拠づけ自体はありふれたものであると指摘した。

第2節では、まず贈与のシティズンシップ論における市民性の捉え方（普遍的な利他的贈与を重視する市民性）の概要を述べた。次に、ヒューイトの解釈をもとに、「社会市場」において利他的市民性が社会政策によって陶冶・促進・表出されていくプロセスを示した。そして、そうしたプロセスから導かれた「市民性の陶冶や表出にはいかなる社会政策が必要か」という論点は、現代の様々なシティズンシップ論とその市民性をめぐるビジョンを、福祉研究の主題として捉え返す契機をもたらすが、そうした形で両研究領域の接続性を高めていくことに、贈与のシティズンシップ論の現代的意義を見いだすことができると指摘した。

第3節では、ティトマスが市場を敵視し、「社会市場の贈与原理」と「経済市場の交換原理」との対抗関係を強調しつつも、その対抗性の中身については多くを語っていないことを明らかにした。つぎに、反市場的スタンスの現代的意義を検証するために、マイケル・サンデルによる市場主義の限界に関する議論を参照した。そしてサンデルの議論は、贈与のシティズンシップ論における反市場的スタンスと利他的贈与の倫理性を正当化する論拠として有力なものであることを示した。くわえて、贈与のシティズンシップ論は、市民的な倫理や徳を鍛錬し、倫理空間としての社会市場の強靱化を図るというサンデルが提起した課題を引き受けるとき、その非妥協的な反市場のスタンスには、市民の多種多様な倫理的で反市場的な関心と実践（例えば異質な文化の尊重、脆弱な人々へのケア、自然環境の保護など）、つまり多様な市民性のビジョンの「結節点」となることが期待できるとの見通しを示した。

【第6章 結論】

本章では、本研究の結論をまとめたうえで、本研究での成果を今後どのように発展させていくかについて展望を示し、あわせて課題を述べ、結びとした。

第1節では、本研究の結論を提示した。その結論とは、贈与関係論を根幹とするティトマスの福祉思想（贈与のシティズンシップ論）には、①現代シティズンシップ論と福祉研究との接続性を高めうる論点を導くことができること、②非妥協的な反市場的スタンスを貫いていること、の二点に現代的な意義が見いだせる、というものであった。そして、①は学術的な意義であり、贈与のシティズンシップ論は、「市民性の陶冶・促進・表出にはいかなる社会政策が必要か」という論点を提起することで、現代の様々なシティズンシップ論とその市民性をめぐるビジョンを、福祉研究の主題として捉え返す契機をもたらすと指摘した。また、②は政治的な意義であり、贈与のシティズンシップ論の反市場的スタンス

には、経済市場の不公正と倫理的腐敗と対峙し、市民の多種多様な倫理的で反市場的な関心と実践の結節点となることが期待できると指摘した。

第2節では、今後の展望として、本研究で得られた成果を発展させていくにあたっては、「福祉市民論」というテーマを設定することが有望な選択肢の一つであるとの所見を述べた。そして、いかなる社会政策が市民性の「ストック」の蓄積等にどのような影響を及ぼすか、また、市民性の「ストック」の蓄積等を図るにはどのような社会政策が必要であるかを考えることが、「福祉市民論」の中心課題となるとの展望を示した。

第3節では、残された課題を述べた。第一の課題は、系譜学的な考察を深めることであり、とくにグリーンとティトマス福祉思想との関係をいっそう明確化することが必要である。第二の課題は、『贈与関係』を文字通り「贈与論」として捉えた場合、どのような評価がなされうるかを考察することである。第三の課題は、ティトマス贈与関係論を反市場主義の思想としてさらにラディカルに解釈し直し、反市場論としてのポテンシャルを増強し、抵抗の思想としての意義を明確化することである。以上の三点が残された課題である。